

政治の持続

坂田 正彦

棍 基 二

三里塚現闘の経験が喚起したもの

双方同體關係において、その場の内部で解し、方、その日常的な編成の内部で非常に軽率、
といふことからいへば、必ずや敗北す。切つ裂かねる方法たゞあらが2年半強つて、いふ
であるから絶望するに至つた。しつかり、統じて来たと思ひ。他のいふいだ連隊を組むる
き止めん人が居る場合などは、意焉ての闘争、おつり現團としての日常を送つてゐるに、坂
保つてはいかず、累積關係といふものがあつたりとの位置自体がわからなくなつてしまひ
社

現在の政治運営を在情況の中にあって、三里塚問題を含めた我々の70年代前期の政治体験がどのよしならず域へ転換を晦ひられ、何をつけ加えようかという詮説段階にある。時あたかも政治労農派や政治理念の水準如何にかわらず、不可避な年齢階層との全面攻防を日常的に強いられている私達をさむる大多数の大衆の象徴であるかのように、鉄塔撤去をめぐる三里塚の堅張がクローズアップされている。私はこの上うな中にあって新田左義の「じんづばなしやうばなし」と「覺史の塗りかけ」によつて、つまみ合せながら大衆運動の食い済しとは別の位相から、三里塚闘争へのかわりを行つてきたと自負している。しかし、三里塚問題をスカラシティに政治語るという意を排すためにも、己れの誕生して立つ位置を鮮明にして、プロセスを明らかにすることによって、現下の情況へのアタックへの手続きを最底限のところで確保したい。

出方の問題と日常場の構成

坂田 僕の考えた範囲では、現実関係の場
で、どういった引き出し方をしてくるのか
というのが主体の状況として続いている。

対同盟とはいひの時間は「一緒じゃない」とか
々あるわけだけれども、具体的な場の問題
については考えていけば、身体表現という

等みたいなところを考慮しないと常に倒錯などわけだ。具体的な場といつても関係の場だね、僕らの想定する思想的な場ではないと

「」とが言えるんじゃない。そして面白いし、そういう条件を日常的な構成の側面から見て、かといった時に、決められてある場の

が、体の知れないところへもあつたと思う。むは、朝から晩まで一緒に居る、食べる、寝て、ついで最終回でも、窓の上か下

個と社会の架橋構造の浮上

じふうじがよくわからなかつたと思ひん
だ。これは説明出来ない問題があつてね。こ
れは、まあ、僕と星ども、やると言つた記憶が
あるだけだ。いつ中で叛旗派の構成員

かとがつてゐる。その結合の問題については、逆にほんの現園園の構成、日常的な構成も含めて考えていく相場では非常に重要な問題だ。そこで、この二つの問題が理解できれば、もう二つは同じように理解できる。なぜなら、二つの問題が理解できれば、それから二つ目の問題が理解できるからである。つまり、二つの問題が理解できれば、二つの問題が理解できるからである。

「ほんとうのがむすかしい」と書きます。が、今何が問題になつてゐるかがむすかしい。一前ではないし。彼はむづらう具合に、ぼくは政治的な構想力がなかつたとかいうふうにいつのかこといつたり、おもやうて飯を食つとじやなくてむじやうといつて社会の判断の問題

現地にて具体的に自分の身体の動かし方をじごくのかうたうの由で、頭のこどりたるかわいがりの心が、それと切り離かねやううじひとがあ、いつ心勞は體だあつた風。穴を開けて、歴史的な時間も個性的な時間も、ついでに何をやつてゐるか、それを思ひながら、茶の間の音を聴ひながら、とてても震えられながら手を洗つていた。やがて

出方の問題と日常場の構成

坂田 僕の考えた範囲では、現実関係の場面で、どういった引き出し方をしてくるのか、というのが主体の状況として続いている。

対同盟とぼくらの時間は一緒じゃないとか
々あるわけだけれども、具体的な場の問題
について考えていくば、身体表現という

等みたいなどこの考慮しないと常に倒錯などわけだ。具体的な場についても関係の場だけね、璞らの想定する思想的な場ではないと

」ことが書かれてるんじゃないかな。そりゃまあいいや、もうこう条件を日常的な構成の側にいじらへて、かういう特徴を決めておき場の問題

が 体の知れないところ」ともあったと思つ。わ
む はり、朝から晩まで一緒に居る、食べる、寝る
題 七つ以上で最終回面では、着の上半身不^可

労働主体の意識・関係の 変容を直視せよ!

対象としての労働域と闘論の所在

第一回・第二回労闘講座を終えて

○去る二月二十一日の「戦後労働運動と官公労・民間・未組織」問題での講演と討論を皮切りに春期労闘講座はスタートした。続く三月二日には「塵芥構造と賃金、雇用」問題を取りあげて第二回の講義が行なわれ、現在次の準備が実行委を中心に行なわれている。

例年の春になると春闘と併行して諸政治団体から「春闘討論集会」といふ大衆集会にみせながら内では純然たる労派イデオロギーと心の大衆を外に浮かべ、戦略的啓発の音楽といつ集会設定がバーチカル化していることは周知のことである。私はそうしたバーチカル化する諸派の意図とは全く異なる立場から労闘講座における労働の基本課題と方向性を想定し、労働者運動を問題にしてきた。

現在、私はまだが問題にしている労働議論は、労働運動における政治的立場(階級的)からその左(階級的・散闘的)から右(階級的・戦闘論)といふ労働者運動といつ化している。

く實をかけえない知識の大衆の社会的な現象との葛藤から無縫にはじき出された結果ではなくむしろその手前を足下の領域を抜きうる試みである。

③労闘講座で私が扱わせたのは、この領域とは、かつては全労協や反撃を生み出した母集団であり、また、政治団派に所属している労働組合であるが、議論中であるかに関係なく誰も避けて通れない日々の感性レヴェルでの、話しかけられて成立する生活空間の領域である。この領域での主体のあり様は機にさらされている。これで、世間の水準としての自由国家資本から断絶した世界で孤立し、生活思想構成、自己統括の危機にさらされている私たちは、これまでの水準で、いかに決して通れないところにひりついている現実である。

日本の社会へもたらしている私的生活防衛し、意の自由の享受がその裏面にひりついている現実であり、爆弾、内閣開戦と政治状況によるものである。

第3回労闘講座テーマ

家族、職場、組織編成と政治帯域

私はこの頃には、新聞をさむと必ず「我が国民には、新聞をさむことが必要になってるといいます」とある。そこで、その様な社会現象との接点で、すなはち社会を自らの足で歩みながらの国家としてある。

労闘講座の試みは、自己史の現れを除いては關係世界や歴史的現存性との接点で、すなはち社会を含めたかかる抗議闘争と、心理的・状況的な指標であることから眼を外さず直視することができる。

労闘講座は、政治不活性化での政治的立場(階級的)からその左(階級的・散闘的)から右(階級的・戦闘論)といふ労働者運動を形成している。これが、労働運動の優位性が労働者集団が積み重ねた労働運動における政治的立場(階級的)からその左(階級的・散闘的)から右(階級的・戦闘論)といふ労働者運動といつ化している。

く實をかけえない知識の大衆の社会的な現象との葛藤から無縫にはじき出された結果ではなくむしろその手前を足下の領域を抜きうる試みである。

③労闘講座で私が扱わせたのは、この領域とは、かつては全労協や反撃を生み出した母集団であり、また、政治団派に所属している労働組合であるが、議論中であるかに関係なく誰も避けて通れない日々の感性レヴェルでの、話しかけられて成立する生活空間の領域である。この領域での主体のあり様は機にさらされている。これで、世間の水準としての自由国家資本から断絶した世界で孤立し、生活思想構成、自己統括の危機にさらされている私たちは、これまでの水準で、いかに決して通れないところにひりついている現実である。

日本の社会へもたらしている私的生活防衛し、意の自由の享受がその裏面にひりついている現実であり、爆弾、内閣開戦と政治状況によるものである。

第4回労闘講座テーマ

労働者運動と労働者自身の問題

私はこの頃には、新聞をさむと必ず「我が国民には、新聞をさむことが必要になってるといいます」とある。そこで、その様な社会現象との接点で、すなはち社会を自らの足で歩みながらの国家としてある。

労闘講座の試みは、自己史の現れを除いては關係世界や歴史的現存性との接点で、すなはち社会を含めたかかる抗議闘争と、心理的・状況的な指標であることから眼を外さず直視することができる。

労闘講座は、政治不活性化での政治的立場(階級的)からその左(階級的・散闘的)から右(階級的・戦闘論)といふ労働者運動を形成している。これが、労働運動の優位性が労働者集団が積み重ねた労働運動における政治的立場(階級的)からその左(階級的・散闘的)から右(階級的・戦闘論)といふ労働者運動といつ化している。

く實をかけえない知識の大衆の社会的な現象との葛藤から無縫にはじき出された結果ではなくむしろその手前を足下の領域を抜きうる試みである。

③労闘講座で私が扱わせたのは、この領域とは、かつては全労協や反撃を生み出した母集団であり、また、政治団派に所属している労働組合であるが、議論中であるかに関係なく誰も避けて通れない日々の感性レヴェルでの、話しかけられて成立する生活空間の領域である。この領域での主体のあり様は機にさらされている私たちは、これまでの水準で、いかに決して通れないところにひりついている現実である。

第5回労闘講座テーマ

労働者運動と労働者自身の問題

私はこの頃には、新聞をさむと必ず「我が国民には、新聞をさむことが必要になってるといいます」とある。そこで、その様な社会現象との接点で、すなはち社会を自らの足で歩みながらの国家としてある。

労闘講座の試みは、自己史の現れを除いては關係世界や歴史的現存性との接点で、すなはち社会を含めたかかる抗議闘争と、心理的・状況的な指標であることから眼を外さず直視することができる。

労闘講座は、政治不活性化での政治的立場(階級的)からその左(階級的・散闘的)から右(階級的・戦闘論)といふ労働者運動を形成している。これが、労働運動の優位性が労働者集団が積み重ねた労働運動における政治的立場(階級的)からその左(階級的・散闘的)から右(階級的・戦闘論)といふ労働者運動といつ化している。

く實をかけえない知識の大衆の社会的な現象との葛藤から無縫にはじき出された結果ではなくむしろその手前を足下の領域を抜きうる試みである。

③労闘講座で私が扱わせたのは、この領域とは、かつては全労協や反撃を生み出した母集団であり、また、政治団派に所属している労働組合であるが、議論中であるかに関係なく誰も避けて通れない日々の感性レヴェルでの、話しかけられて成立する生活空間の領域である。この領域での主体のあり様は機にさらされている私たちは、これまでの水準で、いかに決して通れないところにひりついている現実である。

第6回労闘講座テーマ

労働者運動と労働者自身の問題

私はこの頃には、新聞をさむと必ず「我が国民には、新聞をさむことが必要になってるといいます」とある。そこで、その様な社会現象との接点で、すなはち社会を自らの足で歩みながらの国家としてある。

労闘講座の試みは、自己史の現れを除いては關係世界や歴史的現存性との接点で、すなはち社会を含めたかかる抗議闘争と、心理的・状況的な指標であることから眼を外さず直視することができる。

労闘講座は、政治不活性化での政治的立場(階級的)からその左(階級的・散闘的)から右(階級的・戦闘論)といふ労働者運動を形成している。これが、労働運動の優位性が労働者集団が積み重ねた労働運動における政治的立場(階級的)からその左(階級的・散闘的)から右(階級的・戦闘論)といふ労働者運動といつ化している。

く實をかけえない知識の大衆の社会的な現象との葛藤から無縫にはじき出された結果ではなくむしろその手前を足下の領域を抜きうる試みである。

③労闘講座で私が扱わせたのは、この領域とは、かつては全労協や反撃を生み出した母集団であり、また、政治団派に所属している労働組合であるが、議論中であるかに関係なく誰も避けて通れない日々の感性レヴェルでの、話しかけられて成立する生活空間の領域である。この領域での主体のあり様は機にさらされている私たちは、これまでの水準で、いかに決して通れないところにひりついている現実である。

第7回労闘講座テーマ

労働者運動と労働者自身の問題

私はこの頃には、新聞をさむと必ず「我が国民には、新聞をさむことが必要になってるといいます」とある。そこで、その様な社会現象との接点で、すなはち社会を自らの足で歩みながらの国家としてある。

労闘講座の試みは、自己史の現れを除いては關係世界や歴史的現存性との接点で、すなはち社会を含めたかかる抗議闘争と、心理的・状況的な指標であることから眼を外さず直視することができる。

労闘講座は、政治不活性化での政治的立場(階級的)からその左(階級的・散闘的)から右(階級的・戦闘論)といふ労働者運動を形成している。これが、労働運動の優位性が労働者集団が積み重ねた労働運動における政治的立場(階級的)からその左(階級的・散闘的)から右(階級的・戦闘論)といふ労働者運動といつ化している。

く實をかけえない知識の大衆の社会的な現象との葛藤から無縫にはじき出された結果ではなくむしろその手前を足下の領域を抜きうる試みである。

③労闘講座で私が扱わせたのは、この領域とは、かつては全労協や反撃を生み出した母集団であり、また、政治団派に所属している労働組合であるが、議論中であるかに関係なく誰も避けて通れない日々の感性レヴェルでの、話しかけられて成立する生活空間の領域である。この領域での主体のあり様は機にさらされている私たちは、これまでの水準で、いかに決して通れないところにひりついている現実である。

第8回労闘講座テーマ

労働者運動と労働者自身の問題

私はこの頃には、新聞をさむと必ず「我が国民には、新聞をさむことが必要になってるといいます」とある。そこで、その様な社会現象との接点で、すなはち社会を自らの足で歩みながらの国家としてある。

労闘講座の試みは、自己史の現れを除いては關係世界や歴史的現存性との接点で、すなはち社会を含めたかかる抗議闘争と、心理的・状況的な指標であることから眼を外さず直視することができる。

労闘講座は、政治不活性化での政治的立場(階級的)からその左(階級的・散闘的)から右(階級的・戦闘論)といふ労働者運動を形成している。これが、労働運動の優位性が労働者集団が積み重ねた労働運動における政治的立場(階級的)からその左(階級的・散闘的)から右(階級的・戦闘論)といふ労働者運動といつ化している。

く實をかけえない知識の大衆の社会的な現象との葛藤から無縫にはじき出された結果ではなくむしろその手前を足下の領域を抜きうる試みである。

③労闘講座で私が扱わせたのは、この領域とは、かつては全労協や反撃を生み出した母集団であり、また、政治団派に所属している労働組合であるが、議論中であるかに関係なく誰も避けて通れない日々の感性レヴェルでの、話しかけられて成立する生活空間の領域である。この領域での主体のあり様は機にさらされている私たちは、これまでの水準で、いかに決して通れないところにひりついている現実である。

ロッキード問題への視点

ロッキード問題の本質とは何か、ロッキード問題の世界性とは何か、こういったことを考える

基底を時代的に、情況的にもわざわざは越えておこない。74年夏まで我々が闘ったインシート問題の世界性や情況的本質性を重視する上で矢張りの大きな問題だ。作業的なではないのか。特に、沖一三一空戦争から早大闘争を経て、インシート問題へと情況的に至らつて来た我々の政治活動の連續性の相手との様に対象化されたかといふ上で難むことができる。

対象的本質は複雑に絡みあい、引き寄せる側の意の数ほど世界論が成立する。ロッキード事件を地域的な問題の切実性として解く方法も、世界性の問題として抽象するよりも自由である。しかし情況の本質問題としてとらえるといふ意味では、確かに、ロッキード問題が日本における社会の現実問題として上位の立場を取る。しかしながら、その本質問題としてとらえるといふ意味では、確かに、ロッキード事件を地域的な問題の切実性として解く方法も、世界性の問題として抽象するよりも自由である。しかし情

(価値構成)からの最底の脱

の水準として残われており、その

矛盾は、個体性としての個体

の側面、共同性としての家族

の立場にもっとも集中的に露出

している。

アメリカ社会の深部で生息する

世界性の問題は、イデオロギー以

てあり、イデオロギーを超えて対

が問題なのではなく、共同性の

死滅の問題である。

アメリカ社会問題が、ベトナム戦争の敗

退から端を発していいるという現実

は水準の国家の命運の象徴であ

る。歴史的な共同性の構成転換

が問題なのではなく、共同性の

死滅の問題である。

アメリカ社会の構成転換

が、上院公聴会や社会派シャーナー

ギーの自然関係と情熱社会が露

出する。歴史的な共同性の構成転換

がある。

ベトナム戦争の敗退以降、アメ

リカ社会のコミニティケーション

が、上院公聴会や社会派シャーナー